

## 有島武郎

七月九日の日本の新聞を見ると、有島武郎が死んだと云う。わたしはそれを聞いて大きな驚きを禁じ得なかった。わけは違うけれども、ちょうど十余年前神田の路上である新聞の号外を買い、幸徳秋水らが死刑を執行されたというのを聞いたのと同様の驚きであった。というのは彼らの死はただわれわれを痛惜させただけではないからである。

有島武郎（Arishima Takeo）は明治十一年（1877）に生まれいま四十七歳である。彼は二十六歳で札幌農学校を卒業、アメリカに留学し、帰国後は母校の英文講師を八年勤め、大正四年（1915）退職し、以後はもっぱら文学に力を注いだ。彼は最初“白樺”一派に属し、その後は独立して著作し、書いたものを『有島武郎著作集』にまとめ、すでに十四集を出し、また独自に個人雑誌『泉』を刊行している。彼はかつてキリスト教に入り、また幸徳秋水と識り、社会主義思想の影響を受けた。去年は私有の田地を放棄して、小作に分け与え、自分は体一つでもっぱら文筆で以て自給した。これらはすべて過去のことである。六月八日旅行に出かけ、以後消息を絶ち、七月七日になって軽井沢の別荘管理人が彼が一人の女性とともに空き家で縊死しているのを発見した。新聞によれば彼女は波多野夫人、名は秋子というが、確かな事はまだ分からない。

有島君はなぜ情死したのか、知る人は誰もいない。要するに必ずしもすべてが恋愛のためではないだろう。秋田雨雀は彼の近来の“虚無的心境”からだろうと言い、某氏は“彼の周りには生活上の疲労と倦怠が纏わり付いていた”と言う。おそらくいずれもそれなりの関係はあるだろう。彼はその母と三人の子どもに残した遺書の中で言う。“わたし〔父〕は出来るだけの力で戦ってきたよ。かうした行為が異常な行為であるのは心得てゐます。みんなの怒りと悲しみとを感じないではありません。けれども仕方がありません。如何戦つても私は此運命からのがれることができなくなつたのですから。私は心からのよろこびを以てその運命に近づいてゆくのですから。凡てを許して下さい。”また弟妹たちへの手紙に言う。“私のあなた方にに告げ得るよろこびは死が外界の圧迫によつて寸毫もうながされてはいないといふ事です。私達は最も自由に歓喜して死を迎へるのです。軽井沢に列車の到着せんとする今も私達は笑ひながら楽しく語り合つてゐます。ど如何か暫く私達を世の習慣から引放して考へて下さい。”われわれは彼の死の理由を知りたいとは思ふが、決して判断を加えようとは思わない。無論どんな理由にしる、自己の生命を以て自己の感情あるいは思想に酬いたのであるから、一種の莊嚴がわれわれの口を掩う。われわれはもちろん生を弄ぶべきでないし、またまさに死を侮蔑すべきでもない。

有島君の作品は、わたしが最も好きなのは当初『白樺』に載つた『幼き者へ』である。この篇と「お末の死」は魯迅君が訳出して、『現代日本小説集』に編入したが、原稿は編集済みで上海の書店に渡されたが、もう十四ヵ月たつのに、まだ出版されない。このほかにはわたしが訳した『潮霧』が一篇あるきりで、去年一月の『東方雑誌』に載せた。附録に彼の論文の一節をつけた。いまここに節録して、彼の創作に対する要求と態度がほぼ見ることができる。

“私は第一淋しいから、創作をします。……

私はまた、愛するが故に、創作をします。……

私は又愛したいとが故に、創作をします。……

私はまた私自身の生活を鞭打たんが為に、創作をします。何んといふぐうたらな向上性の欠けた私の生活だらう。私はそれを厭ふ。私には脱ぎ捨つべき殻がいくつもある。私の作品は鞭となつてその頑な殻をきびしくひつぱたいてくれるのだ。如何か私の生活が作品によつて改造されるように。”\*

有島君は死んだ。これは実に惜しむべく想うべき事である。日本文壇のまわりの“ハイエナ”(Hyaena)は彼の墓上に夜ごと吠えるだろう、“熱風”はまた吹き荒れるだろう。これは故人にはもうなんの関係もない。しかし人の世の大砂漠では、何にでも出会う。われわれはただ遠く近く何人かの同行者を望見して、ようやく寂寞と空虚を免れるだけだ。

※初出：1923年7月17日『晨报副刊』

---

\*『有島武郎著作集』14 「四つの事」。なお「潮霧」の中国語訳は『周作人訳文全集』第8巻に所収。